

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ

<http://shakatsusushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsusushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649  
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

FA X (03)329915367

購読料 月額 (郵送 350円・メール 175円)

6カ月前納制

## 〈もくじ〉

### ■巻頭言■

春 闘 六〇年  
資本の本質は変わっていない

滝野 忠……2

東京における「向坂教室」

— 国労反合研と向坂逸郎先生 —

宮坂 要……3

「日常の事務をしつかりやることを怠るな」

— 向坂先生の叱咤激励 —

浜田 嘉彦……4

『資本論』をまず読む！

— 望むは向坂逸郎全集発刊 —

稲村 守……5

『共産党宣言』を元日に読む

— 上野論文『中国の今をどうみるか』も見る —

原 野人……7

『資本論』を、どう読むか(二)

— 経済学の方法と「宇野理論」 —

小林 晃……10

読者からのおたより……………12

# 旬刊 社会通信

NO. 1186

二〇一五年二月一五日号

二〇一五年二月一五日発行  
(毎月一日・一五日二回発行)

春闘発足は一九五五年、今年は六〇年となる。資本の利益は労働者階級の剰余労働が生む。資本家はしたがって、搾取の度を強め、剰余労働を増やすことを、絶対的使命とする。資本家にとって資本の価値増殖がすべてであり、彼らの社会的使命・責任である。

経団連・経営労働政策委員会が恒例の「報告」を公表した。彼らの主張は日経連が一九四八年結成された時から変わることはいつもない。歴史に則し明らかにしよう。日経連は一九五四年二月、健全賃金三原則を示した。

「①賃金の決定に当たっては企業の生産性並に商品の市場性によって生ずる企業の支払い能力を原資とし、さらに資本と労働の生産への貢献度を勘案して考慮すべきである。

②大規模産業が単に企業の支払い能力面より可能なりとして、無制限なベースアップを許容するときは、業種別・規模別及び労働の組織未組織の別にする勤労者所得の較差はさらに拡大し、また物価引き下げの国家的要請に相反する。従って大規模産業及至基礎産業の賃金決定に当たっては国民経済的見地に立って一層厳正に対処しなければならぬ。

③賃金決定に当たっては、利益、配当、金利、償却、資産再評価等企業経営の厳しい現状分析に立って充分吟味検討を加えなければならない。」（『日経連五十年史本編』三二頁）

日経連は、企業の支払い能力を超えた要求には毅然たる態度で臨め、安易な妥協を排せと発破をかける。春闘方式が本格化した一九五七年十月、臨時総会は「大組織の労働組合を中心とするいわゆる恒例のベースアップ闘争方式は、徒らに中小企業労働者との賃金格差を増大する。よって、われわれはベース・アップ方式を極力排除して、これに代わる合理的な昇給方式に努めなければならない。」（同、四〇頁）

一五年版『報告』にある基本姿勢は『労使パートナーシップ対話』を充実させよ』の視点からこう主張する。

「①各会社は人事・賃金制度を見直し、制度の多様化が進んでいる。今後さらに、仕事・役割・貢献度を基軸とした制度への移行が求められる。

②賃金等を決定する際の基本的な考え方としては引き続き総額人件費管理を徹底する必要がある。

③総額人件費の多くが所定内給与に連動するかたちで決まってくることから、所定内給与を引き上げると、総額人件費は約一・七倍増加することに留意すべきである。」  
①は労働法制改悪、②は総額人件費管理、③はベア引き上げは「避けるべし」と号令する。

このような観点から――

「①賃金等の労働条件は、総額人件費の適切な管理のもと、自社の支払い能力に基づき決定することが原則である。

②その原則に照らしながら、収益が拡大している企業は、設備投資や研究開発投資、雇用拡大等とあわせ定期昇給の実施や賞与・一時金の反映、諸手当の改定を含めた賃金の引き上げを前向きに検討することが強く期待される。

③賃金自体が多様であるため、『賃金の引き上げⅡベースアップ』といった単純なものとならず、ベースアップは賃金を引き上げる場合の一つの選択肢となる。」

資本が資本であるかぎり、資本が競争で生き残るには、剰余価値をふやす他ない。それには不払い労働の拡大が資本の生命となる。

(滝野 忠)

## 東京における「向坂教室」

― 国労反合理研と向坂逸郎先生 ―

**岩井章さんと国労甲府支部** 私が国鉄に入ったのは、一九五二年でした。職場は東横浜という貨物駅で、連結手という職名で三年間働きました。当時のことですから就職と同時に国労に加入し、職場大会という名のストライキにも参加しました。しかし、労働者意識は充分なものではありませんでした。

東横浜駅で三年間働いた後、車掌となって山梨県の甲府へ転勤することとなりました。当時、国鉄の甲府地区は、総評事務局長で長く活躍した岩井章さんの影響が強く残っている地区でした。岩井章さんは、長野県の上諏訪機関区の出身でしたが、戦後数年間は国労甲府支部の書記長などの役員をしていました。

戦後の国鉄の管理機構は、名古屋鉄道局甲府管理部となり、甲府管理部の範囲は、山梨全県と長野県南部を含む広いものでした。そのため、岩井さんも国労甲府支部の役員を歴任して国労本部の企画部長となり、総評事務局長となったのです。そのため、甲府地区における岩井さんの影響力は、非常に強いものがありました。多くの先輩たちが、なにか職場で問題があれば、「岩井さんならこうしただろう」といつて対処していました。そんな岩井さんの影響力の残る職場で、徐々に労働者意識を学び、全くのノンポリだった私が国労青年部の活動に参加するようになりました。

**向坂論文** 国労青年部では、分会青年部長から支部青年部長となり、青年部中央常任委員となって全国の仲間と交流するようになりました。そうなると労働者思想を学ばなければなりません。

当時、雑誌『社会主義』には、毎月必ず向坂逸郎先生の論文が掲載されていました。向坂先生の文章は、非常にわかりやすく、青年部の活動をはじめたばかりの私にとって最良の学習資料となりました。毎月、向坂論文を読んで青年部活動のエネルギーにしていたものです。

**国労反合理化研究会** 一九七〇年前後、国鉄当局は「マル生」（生産性向上運動の「生」の字を丸でかこんでマル生と呼ぶ）という名の国労脱退強要を全国的に展開しました。この組織破壊攻撃に対して、全国の職場で反撃の闘いが展開されました。しか

し、当局の国労脱退強要は続き、組織的な危機を迎えました。そこで、全国の国労の仲間たちが当局の不当労働行為の摘発闘争をすすめ、公労委（公共企業体等労働委員会）へ提訴し、闘いが発展しました。

一九七〇年には、函館における国労全国大会で反マル生の闘いをめぐって激論が展開されました。最終的には、当時の中川委員長が「座して死を待つより、起つて反撃に転じよう」という特別発言で意思統一されました。この反マル生闘争は全国で前進し、国会において当時の国鉄総裁が陳謝するところまで発展しました。この反マル生闘争の前進のなかで発足したのが、国労反合研でした。

この国労反合研は、全国各地で結成されましたが、東京における中央反合研が大きな役割を果たしました。この東京における中央反合研は、毎月、泊まり込みで行われ、向坂先生は毎日夜一二時まで出席され、多くの助言をいただきました。

この泊まり込みの中央反合研には、元三池労組書記長だった灰原茂雄さんも社会主義協会組織部長として出席され、翌日明け方までの交流会にまで残っていただきました。この泊まり込みの中央反合研は、東京における向坂教室となり、多くの活動家を育ててきました。この反合研運動で育った活動家によって、一九八〇年以降の国鉄闘争が組織されたといつて過言ではありません。

向坂先生が国労のためにご指導していただいた教訓を必ず後世に残すことが重要だと思っています。  
（元国労書記長 宮坂 要）

## 「日常の事務をしっかりとやることを怠るな」

― 向坂先生の叱咤激励 ―

向坂先生が亡くなられて早三〇年にもなる。ということ滝野さんから電話をいただき、何か書けとの指示をいただいたものの、自分としては高知の片田舎に居て、直接先生からご指導いただくというのではなく、先生の講演や論文などで影響を受けてきた者としては、エピソードなどもないため引き受けたものの、はたと困ってしまいました。

早三〇年にもなるのかと思いつつながら、協会規制の頃のことを思い出していましたが、この規制のために「進路」が廃止となり「社会通信」が生まれることになりましたが、その「社会通信」もすでに一千百号を超えました。滝野さんの粘りと努力にはただただ敬服するのみです。

向坂先生の講演や書かれた論文などの中で、私が一番印象に残っているのは、「日常の事務をしっかりとやることを怠るな」という言葉です。

当時社会党以外の党のことは知りませんでしたが、当時の社会党においては、全国大会においても高知県本部の大会においても、毎回毎回膨大な額の未収金が出てくることでした。党の財政規模からして私にはこのような未収金が出てくることについては、とても理解できるものではありませんでした。結局一定の額については欠損処理をするしかないということとなっていました。

党費や機関紙、各種出版物の売り上げ金の集金は、党の財政を支える基本的な仕事

です。ここに膨大な額の穴を開ければ、党そのものの存立にもかかわることとなり、党にとつては死活問題ですが、大会はそのことをさほど気にするでもなく、蕩々（とうとう）と議論が続けられました。

向坂先生の言う「日常の事務をしつかりやることを怠るな」との言葉は、社会党の現状があまりにもだらしのない状態を見てのことだったと思います。財政に限らず、日常の連絡やその他の事務について、しつかりと行うことは、社会主義政党のイロハであり、このことを抜きにして社会を変えるだけの力を、党につけることはできないとの考えからだだったと思っています。

今日その社会党はありません。社会党の精神を一番引き継いでいるのが新社会党ですが、この党も今は国会議員を失い、勤労大衆に影響を及ぼすことが極めて難しい状態にまで小さくなっています。そのような中で新社会党も、社会党時代の欠点としての財政運営の粗雑さが引き継がれています。

党費をためないできちんと集めることは、党員を大切にすることであるし、党を大切にすることです。また、定期出版物を日を遅らせずに配布し、代金を溜めないで集金することは、読者や支持者を大事にすることですし、ひいては党への信頼を高めることになるのです。これがおろそかになれば、党への信頼を失い、党員や読者であり支持者でもある人々を失うことになりません。

新社会党を取り巻く状況は、社会主義が大きく後退していることも含めて、これ以上無いほどに厳しいものがあります。このような時代であればあるほどに、党員を大事にし、出版物の購読者でもあり党の支持者でもある人々を大事にすることは、党を守り抜きやがて大きくはばくためにも、やり遂げなければならぬ入り口の仕事です。このことをおろそかにして社会を変える力をもった党が育つことは、夢物語です。向坂先生が何かにつけ言っていた「日常の事務をしつかりやることを怠るな」との叱咤激励は、先生が亡くなって三〇年という時、改めて胸に迫るものを覚えます。はちまきを締め直して今年を乗り切っていきたいと思えます。（浜田 嘉彦）

## 『資本論』をまづ読む！

― 望むは向坂逸郎全集発行 ―

高校時代に社会問題の本をかじっていた私は、大学で何としてもマルクス『資本論』を読もうと決意した。しかしそこで入門書を探して宇野弘蔵氏の書籍に出会ってしまった。「宇野理論」かぶれとなつてしまった。『資本論』の原理論への純化、「三段階論」、「科学とイデオロギーの峻別」など「日本人離れした強靱な思弁力」（その弟子曰く）にしばられてしまった。理論と実践の分離や『資本論』から肝心な結論的部分である「資本主義的蓄積の一般法則」や「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を切り捨てる「純化」など、今から考えればありえないことだったが。

そんなこんなで宇野弘蔵著を何十冊も読んで一年少し過ぎたとき、私は入学時から学生のゼミナール学習会促進や講演会開催など行う組織で運動をしていたが、その秋の連続講演会の責任者となつていた。そこに同じ組織のある先輩が「向坂先生はど

う？」と勧めてくれたので、一も二にもなく乗って、その連続講演会の最初の記念大講演会は向坂逸郎先生と決定した。

七十二年秋正式決定に至るまでの学生組織内部や院生、教授会とのやりとりの苦勞はともかく、日本共産党員と思しき教授連はいっせいに「今度の講演会で来られる向坂氏は現実分析をすべて資本一般世界に還元する」との「向坂理論批判」を授業冒頭にやり、逆宣伝してくれたおかげで会場いっぱいのお六百人の盛況となった。「全共闘」学生を駆逐した立命館大学の「民主化」の頂点とも言える時期であった。

講演会は先生のおばあさんの話やマルクス経済学をめぐる様々な話でなごやかに終わった。が、それからの「講師を囲む会」がすごかった。先生の隣に座っていた私は、新「左」翼くずれの学生が「先生は窮乏化の形態が変わったと言われているけど、釜ヶ崎では餓死者が今でも出てるじゃないですか?!」との質問に、「だから組織労働者の組織を強化するしかないじゃないか。他に何かあるかね。あつたら言ってみたまえ。名案があれば君を社会党の顧問にしてやろう」と。一同爆笑。

日本共産党・民青の活動家が「中国で（こともあろうに）資本主義国の日本から物資が必要だと輸入の要請が出されているがどうか？」と聞くと、「それは中国の国民がその使用価値を必要としているからだよ。君は『資本論』を読んだのかね」と。

その学生が「一応読みました」と答えると、「もつとちゃんと読みなさい」と一喝され、頭を掻いていた。

その『資本論』をまず読む！という先生の迫力に目を覚まされた私は、ただちに三畳のアパートの一室で学習会を始めた。どんどん参加者は増えて、廊下にもいっぱい同級生や知り合いの学生がやってきた。ただ一回二回と回を重ねるにつれ、本を読み合わせ、一応レポーター決めての学習会、どんぐりの背比べでやっていたが参加者は毎回減り、気づいたら私含めてたった二人となっていた。

それでも十ヶ月位かけて二人で第一巻を読みきり、二巻目に入ると「小選挙区制反対闘争とかやらないといかんから」とそのもう一人も来なくなった（別にその運動は否定はしていなかったのだが）。しようがないから一人で学習会し続けた。ちょうど一年経ってアパートで『資本論』を読んでいると、「すまん」と、かなり前から学習会に来なくなっていたH君がやってきた（戻ってきた）。

そのH君と二人で大阪の社会主義協会関西支局に本を買いに行つて、今にして思うとその世界で名だたる中心メンバーが三人で打ち合わせ中で、学習会参加の誘いも後日受け、翌年の正月にはそのH君と向坂先生のご自宅を訪問もさせていただいた。その春日本社会主義青年同盟に加入し、学生合同班から社青同立命館大学班の結成へと発展していった。

先輩の勧めで卒業寸前に京都総評に入局し、総評オルグ四一年目を迎えた。今滋賀県に居住して地元で生涯何度目かの『資本論』学習会を細々と始めてから五年目となり、月一回で次回は四一回目となる。「人生最後の『資本論』学習会だ」と張り切っていた仲間もいたが、遅々として進まない。今、向坂逸郎訳岩波文庫版でようやく二

冊目にはいり、第一巻「資本の生産過程」第三篇「絶対的剰余価値の生産」第八章「労働日」の第六節「標準労働日のための闘争。労働時間の強制法による制限。一八三三—一八六四年のイギリスの工場立法」を学習している。

レポーターのAさんは、「第六節はマルクスが最も力を入れて書いた部分であろう。労働者階級に向かって、自分たちの階級がおかれた立場を自覚させるといふ観点からして、『資本論』のなかでも、最も読みやすく理解しやすいように記述されている」と。イギリスのこの頃のチャーティスト運動については、さすがにインタネット検索でも詳細があまり出てこないのがAさんも苦勞しているが、「このチャーティスト運動はとにかく徹底研究に値する」とこの部分は半年以上やり、まだ続いている。

一緒に学習会をやっているこの方は、原野さんや小林先生、滝野さんをはじめとする執筆者の『社会通信』は、「いろんな具体的な問題を『資本論』や価値論などと絡めて展開しているが、すばらしい。向坂逸郎さんや労働派はすごい。『資本論』学習会をしてきて本当に良かった」と、『社会通信』を定期購読された。

二〇一七年には『資本論』発刊一五〇年を迎えるが、先生没三〇年からの今後二年間で向坂逸郎全集の発刊をぜひ望むものである。（稲村 守 二〇一五・一・一九）

## 『共産党宣言』を元旦に読む

—上野論文『中国の今をどうみるか』も見る—

今年は大内兵衛先生にならって、『共産党宣言』を元旦の読み初めとした。

本誌元旦号で小林晃氏が向坂逸郎先生の言葉として教えているように、「マルクス・エンゲルスが書いている通りに」、あらためて読んだ。

二人はこう書いている。

「自分の生産物の販路をつねにますます拡大しようという欲望にかりたてられて、ブルジョア階級は全地球をかけまわる。どんなところにも、かれらは巢を作り、どんなところをも開拓し、どんなところとも関係を結ばねばならない。

ブルジョア階級は、世界市場の搾取を通して、あらゆる国々の生産と消費とを世界主義的なものに作りあげた。反動家にとってはなほだお気の毒であるが、かれらは、産業の足もとから、民族的な土台を切りくずした。遠い昔からの民族的な産業は破壊されてしまい、またなおも毎日破壊されている。これを押しつけるものはあたらしい産業であり、それを採用するかどうかはすべての文明国民の死活問題となる。しかもそれはもはや国内の原料ではなく、もつとも遠く離れた地帯から出る原料にも加工する産業であり、そしてまたその産業の製品は、国内自身において消費されるばかりでなく、同時にあらゆる大陸においても消費されるのである。国内の生産物で満足していた昔の欲望の代りに、あたらしい欲望があらわれる。この新しい欲望を満足させるためには、もつとも遠く離れた国や気候の生産物が必要となる。昔は地方的、民族的に自足し、まとまっていたのに対して、それに代ってあらゆる方面との交易、民族相互のあらゆる面にわたる依存関係があらわれる。物質的生産におけると同じことが、精神的な生産にも起る。個々の国々の精神的な生産物は共有財産となる。民族的一面

性や偏狭は、ますます不可能となり、多数の民族のおよび地方的文学から、一つの世界文学が形成される。

ブルジョア階級は、すべての生産用具の急速な改良によって、無制限に容易になった交通によって、すべての民族を、どんなに未開な民族をも、文明のなかへ引き入れる。かれらの商品の安い価格は重砲隊であり、これを打ち出せば万里の長城も破壊され、未開人のどんなに頑固な異国人嫌いも降伏をよぎなくされる。かれらはすべての民族をして、もし滅亡したくないならば、ブルジョア階級の生産様式を採用せざるをえなくする。かれらはすべての民族に、いわゆる文明を自国に輸入することを、すなわちブルジョア階級になることを強制する。一言でいえば、ブルジョア階級は、かれら自身の姿に型どって世界を創造するのである。」(大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波文庫版、四四〜四五頁)

いよいよ国際的に肥大化する独占資本と、それを掌握する一握りの独占資本家階級に富が集中し、他方には地球上で圧倒的多数がますます窮乏化しているという現実から目をそらさせようと、ブルジョア学者・近代経済学者は懸命である。

「グローバル化」を近年急に起っている現象であるかのように強調してやまない。かれらは国家の本質に異変が起こって、国境が消えそうになり、独占資本がなくなつて単なる多国籍企業になり、国家独占資本主義も消えてしまったかの主張をする。

蓄積された巨兆の資本や資産は、労働者階級から搾取された剰余労働の結晶であることを知られまいと、ブルジョア学者はあらゆる知恵を絞る。言葉でも、資本家(人格化した資本)と賃金労働者とは対置しない。労働と労働力も区別しない。労・資は搾取・被搾取の関係ではなく分配関係だ。大企業は大資本とはしない。利潤優先ではなく、経済優先だ。社会主義は過去のものだから、新自由主義の向こうに優しい資本主義を求めなさいだ。当節は労働者の紙誌でもこんなことが当たり前である。

「三段階論」の「現状分析」に重きを置くうちに、『資本論』を書いてある通りに読むことを忘れ、現象の中に肝心な基本的法則を忘れて、うっかりブルジョア経済学に惑わされる学者も多くなっている。

しかしマルクス・エンゲルスがかくも明解に述べているように、一九世紀の半ばにはすでに「ブルジョア階級は全地球をかけまわ」って、「重砲隊」のごとく「グローバル化」を進行させていたのである。

本誌昨年十一月一日号に筆者は「中国は資本主義へとすっきり変質し」と書いた。上野義昭氏は『科学的な社会主義』一月号に『中国の今をどうみるか』を書いておられる。氏は「基本的視座」として「都市部は先進資本主義が飛び的に植えつけられているとか、その周辺の東部沿海部中心に中間的な発展の地域があり、その後背には大きな後進農村地域があつて、さらにその外側には、現在紛争がいろいろ起っている辺境地がある。計画経済的なものがまだ残っていたり、市場経済が包摂した地域があるとおもえば、前資本主義的な自給自足経済が残っている。……そういう意味で、中国自体が複合的になっていますが、さらにグローバル化という今日の条件下では、一

的な分析は不十分となっています」という見方を、中国の学者によりながら提示する。今さら資本主義の「グローバル化」を強調しながら、同時に中国の中では、前資本主義的な経済（封建性のことと推察される：引用者注）も先進資本主義も社会主義も残っている、「複合的になつていく」という。「万里の長城も破壊され」ずにまだ残っているから、封建制が残っているとでもいうのであろうか。

いささか講座派的な理論に似てもいるが、今日の日本にも、地方では山間地でなくとも「自給自足経済が残っている」。東京都内にさえ退職者や失業者等による「自給自足経済」がみられる。万里の長城こそないが、那覇、熊本、唐津、小倉、松山、高知、福山、岡山、松江、姫路、大阪、京都、彦根、名古屋、犬山、小田原、東京、松本、会津、弘前、松前等々と列島が数珠繋がりになるほどの城が残る。昭和の築城も多い。

他方では、日本でも国有企業や公有企業もあるし、独占資本の内部では極めて濃厚な「計画経済的なもの」もある。

かくして上野氏によれば、日本自体でも、前資本主義的な経済も先進資本主義も社会主義も残っていて、「複合的になつていく」ということになる。世界中のどこの国にも、いたるところに、前資本主義や資本主義や社会主義が、「複合的になつて」散らばっているかのようなのである。

最終節「何を学ぶか」を見ると、

「20世紀の社会主義路線は、一国社会主義路線、鎖国型社会主義でも可能な、資本主義自体が一国単位であり、とりあえず国内型の管理で完結してやっていた国家独占資本主義に対応した社会主義でしたが、その後のグローバル化した資本主義から社会主義に移行していくのが、もはや鎖国型で済まないのならば、グローバルな資本主義と開放・共存しながら、前に進むしかない」というのが上野氏の結論である。

日本でも「グローバルな資本主義、多国籍企業（正しくは多国籍化して巨大化した独占資本）と開放・共存しながら、前に進むしかない」ということになる。肥え太りゆく独占資本と「開放・共存しながら」、われわれはいかに進めというのだろうか。カストロ等は誤りで、鄧小平等が正しかったという意味も含まれる。

中国びいきのF氏からは次のような意見を頂いた。

「習近平にしても李克強にしても、当人や一族の巨額の蓄財が公然の秘密とされています。『腐敗一掃』が額面通りでなく実は派閥闘争だといわれる所以です。

しかも共産党員の中で労働者が占める割合はさきわめて少なくなっています（上野論文にも紹介されているように、二〇一〇年末で八・七％に過ぎず、『労・農・牧・漁民』（勤労階級）全体でも三九・一％である）。

労働者、農民の権利がないがしろにされている状況が等閑視されているように思えます。憲法に社会主義という規定があれば根幹は社会主義だ、というのも、いかなもののでしょうか。昔、ソ連について、党員の中の労働者階級がわずかな割合にすぎなくなつたことをもって、社会主義から変質した、と批判した文章を見た記憶がありますが、これを今の中国に当てはめれば同じことが言えそうです。」

マルクスやエンゲルスは、「鎖国型」資本主義の存在などを微塵も考えていなかったことは先に引用した通りであり、ましてや「鎖国型社会主義」などを夢想したこともなければ、『世界同時革命』を提唱したこともない。

『共産党宣言』は「万国のプロレタリア団結せよ！」と結びながら、次のように宣言している。「ブルジョア階級に対するプロレタリア階級の闘争は、内容上ではないが、形式上は、何よりも第一に国民的闘争である。おのおのの国のプロレタリア階級は、当然まず自分自身のブルジョア階級を片づけねばならない」（同上、五四頁）。

上野氏のせっかくの長い労作も、「基本的視座」が視座だけに、全てがやぶにらみになっているように見える。上野氏ほどの有能な頭脳が、マルクスやレーニンと、ブルジョア経済学諸派とで「複合的に」なってしまうことが惜しまれてならない。中国の怪しげな学者の説に起因する一過性の混迷であることを願う。（原野人）

## 『資本論』を、どう読むか（二）

― 経済学の方法と「宇野理論」 ―

一

『資本論』を、どう読むか―『資本論』（経済学）の方法が、本稿の主題である。方法とは、簡単にいえば、論理展開の筋道であるが、具体的にいえば、一言で弁証法的唯物論（唯物史観）である。（この点については、マルクス『資本論』、『第二版の後書』、文庫版、第一分冊、二六〇―三三頁、参照）。あるいは、エンゲルスにしたがって、『資本論』の論理の展開に、より即した言い方をすれば、「歴史的・論理的」な方法である（『資本論綱要』、向坂訳、岩波文庫、三二四―三二五頁）。どちらかといえば、言葉に馴染（なじみ）が薄い分、えらく難解に聞こえるが、それは「食わず嫌い」の類（たぐい）に近い。

向坂がいうとおり、『資本論』を書いてある通りに読みさえすれば、別に方法論など書かなくてもよく分かる。『資本論』の方法は、他の何処におけるより『資本論』自身の中にあるわけであるから。」

「マルクスの経済学の理解には、弁証法的唯物論（唯物史観）に関する理解が前提されている。『資本論』の研究が、同時の最もよい弁証法の勉強である」（引用文献については、本誌第一一八三号の拙稿（二）参照）。

したがって、『資本論』そのものを熟読する―ただし、子規流の態度を一貫して―ことが、同時に、弁証法的唯物論（歴史的・論理的）方法）を会得する最良の勉強法でもある。だが、『資本論』を、正しく、かつより効果的に読むために、向坂『経済学の方法』（岩波）（マルクス・エンゲルス・レーニンの関連文献も巻末に挙げてある）、向坂『労働者の世界観』（労大新書）の併読をお勧めしたい。

二

ところで、問題の「宇野理論」とその方法は、向坂がいう子規流とは、いわば真反

対であることを本稿(一)でふれておいた。中味を一言でいえば、弁証法とは対照的な思弁(観念)的形式論である。そのことが、もつとも象徴的かつ集約的に示されているのが「原理論」である。

「原理論」は、事実上、『資本論』の組み替えであるが、形(篇別構成)も然(さ)る事ながら、最大の問題は、その中味の組み替えである。触(さわ)りの部分を先ずは紹介しておく。

「エンゲルスは『唯物史観と、剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露とは、実にわれわれがマルクスに負うところである。社会主義はこれによって一つの科学となった』と書いていますが、『資本論』によってもマルクス主義が科学になったわけではありません。多くのマルクス主義者諸君は今もなおマルクス主義は科学であるといっていますが、これは誤りです」(『資本論の経済学』、岩波新書、一六九頁)。

『資本論』の説く社会主義の必然性には私は根本的な疑問をもっている」(同、一八二頁)。

「原理論」では、「永久的に繰返すかの如くにして展開する諸法則」(宇野『経済原論』二二六頁)を「いわゆる円環体系」(『資本論の経済学』五九、六四頁)としてとらえなければならない。

この観点から見ると、『資本論』には多くの「夾雑物」や「不純物」が「混淆」しており、したがって『資本論』自身が原理論として純化されること(前掲『経済原論』一一頁)が必要である。こうした「夾雑物」「不純物」の最たるものがいわゆる「窮乏化法則」である。「マルクスのように労働者階級の窮乏化を資本主義的蓄積の絶対的な一般的な法則とするのは、むしろ十九世紀の三、四十年代のイギリスにみられた旧来の手工業の没落という特殊の事情を無視して一般化したもの」(前掲『資本論の経済学』三〇頁)であり、したがって、せいぜい「窮乏化法則」は「理論的体系としては附録的なものといってよい」(同、一八二頁)。

みられるとおり、『資本論』と「原理論」における、理論の展開の仕方・方法の対照性が明白であろう。一方、量の蓄積から質の転化を中心とする弁証法的論理の、随所に一貫する展開に対して、他方、「永久的に繰返す如くにして展開する」「円環体系」として、いわば同じ軌道上で「永久的な循環運動をくりかえす」論理の展開。

こうした「原理論」の非弁証法的な論理展開を基準にすれば、『資本論』には、多くの「不純物」「夾雑物」が「混淆」しているようにみえるのは当然の帰結である。したがって、それらの除去による『資本論』の「純化」が必要となる。この産物が他ならず宇野「原理論」である。そして、その「不純物」「夾雑物」の最たるものが、『資本論』の理論的核心といふべき「資本主義的蓄積の一般的法則」(「窮乏化法則」)となる。そうかといって、社会主義の歴史的必然の「論証」は、三段階論のどこにもない。

### 三

これまで、再三触れてきたとおり『資本論』の方法とは、一言で弁証法的唯物論に他ならないが、逆にまた、弁証法的唯物論は、『資本論』によって、科学的に肉付け

されたとも言える。以下に引用する向坂「方法」論の結論部分の論述―「円環体系」としての「原理論」を十分に意識した―は、同時に、事実上の「宇野理論」批判でもある。

『資本論』は、資本主義のもつ基本的歴史的性格の論理を追究したものである。この意味で、論理的であると同時に、その論理が歴史的に限定されている。

しかし、マルクスの歴史的論理的方法は、ここにとどまらない。あくことのない発展としての弁証法は、このようなところにとどまることを許さない。剰余価値の法則の論理は、資本主義的蓄積の一般的法則の展開を生まざるをえない。／

資本主義社会の歴史的 성격の論理を、どこまでも推しすすめて行くと、この性格のぎりぎりのところに達する。資本主義的商品生産の内部から、それ自身を否定する要素が成長しているのを認識する。『資本論』の第七篇は、ことにその第二十三章『資本主義的蓄積の一般的法則』は、資本主義が、その限度内で、どこまで発展するかを示している。発展は、一日といえども中止されることはない。したがって、『資本論』が『近代社会の経済的運動法則』を明らかにしているにしても、それは、単純なる法則のくり返しとしてなされているのではない。純粹なるくり返しを考へることは、弁証法的思考の許すところではない。

資本主義も発展している。資本主義の経済的運動法則は、くり返しとして見える。しかし、実はくり返しではない。／

資本主義的蓄積の一般的法則は、一方では、資本の蓄積、集積、集中として現われるが、他方では、貧乏の蓄積、集積、集中として示される。『この転形過程のあらゆる利益を横領し、独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨脹しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も増大する。』／

だから、資本の運動は単なるくり返しではない。量的な発展なのである。量的な発展が、質的な発展に転化する。この転化は、人間の行動である。ただ、人間の行動は、資本主義的蓄積の一般的法則の認識にもとづいて、この法則のもつ条件にしたがって、歴史をつくる。それゆえに、資本主義は、シムムペーターのいうように、どんな社会を生むかに関係なく、ただ崩壊するのでなく、資本主義の内在的法則のつくりだした条件にしたがって、社会主義を成立させる。社会主義の必然が資本主義の中にあるのである。(『経済学の方法』、一四三―一四七頁より、抜粋引用)

(つづく・経済学者 小林 晃)

#### ◇読者からのおたより◇

私は「輝け！憲法」、「脱原発で行こう」、「人間らしく生きたい」、「街かど相談」といった、のぼりを背負って歩き、走り、自転車でも、おかげさまで新年も元気に活動しています。現在は議会や市民相談活動に加えて、毎週の「再稼働反対、全ての原発をゼロに」茨木金曜日行動、月一回の大阪中之島での「秘密保護法廃止！ロックアウトアクション」の集会とパレード、戦争をさせない茨木市民の会、各種選挙の支援に汗を流しています。

今年は統一自治体選挙からスタート。「いのちとくらし」優先の社会をめざす議員を一人でも多く増やしたいと動いています。(『お元気ですか』通巻322号 茨木市議会議員・山下 けいき)